



了譽聖岡上人の果たした役割

了譽^{りょうよしょうげい}聖岡上人は、南北朝～室町時代に活躍した浄土宗の学僧です。瓜連常福寺では、聖岡上人の命日に合わせて「ろくやさん」(二十六夜尊)の法要が毎年執り行われています。そのため地元の方ならば御存知の方が多のですが、全国的には知名度はほとんどありません。しかし聖岡上人は、江戸初期から明治末期に至るまで繰り返し伝記が作成され、怪談『番長皿屋敷』で皿が1枚足りないと嘆くお菊の霊を鎮めた僧侶として(全く時代が合わないにも関わらず!)描かれるほど、広くその名を知られていました。なぜ聖岡上人はこれほど注目され、また忘れ去られたのでしょうか。浄土宗の歴史とともに考えてみましょう。

鎌倉時代に法然上人がおこした浄土宗は、優秀な門弟たちに引き継がれましたが、法然上人の死後、宗内に多数の流派(学派)が生まれます。法然上人が旨とする浄土教は、「南無阿弥陀仏」と念仏をとさえすれば極楽浄土に往生して(生まれ変わって)救われるという明快な教えでした。そのシンプルさゆえに、念仏をとさえするにしても、口に出すのか、心に念じるのか、念仏は1回か、100万回か、心の底からとさえするのか、ただとさえするだけでよいのか、宗内でも意見が分かれたのです。



▲『了譽上人絵詞伝』文政5(1822年)



鈴木 英之
北海学園大学 教授
古代・中世史部会協力員

鎌倉時代に法然上人が開いた浄土宗は、新しい仏教宗派であり、また念仏を重視するため、意図せずとも他の宗派から批判を受けやすい立場にありました。教義が分裂した状態では、他宗の批判に対抗することはできません。そこで聖岡上人は、浄土教義を統一し、未整備だった教団の基礎を創りあげたのです。聖岡上人の教学は、弟子の聖聡(東京・増上寺開基)の宣揚活動もあり、浄土宗の中心的な教学となります。

その後、浄土宗は、徳川家の庇護下に入って大きく勢力を伸ばし、浄土宗の檀林教育(浄土宗の初学者教育プログラム)では、宗祖法然上人の教えよりも、まず聖岡教学を修学することが定められました。これは浄土教の枠組みを、聖岡教学によって理解することを意味します。上人の活躍がなければその後の浄土宗の発展はなく、その偉業から聖岡上人は浄土宗第七祖として讃仰され、数多くの伝記が作られることになったのです。しかし明治期に入ると、宗祖・法然の教えに回帰すべきとの判断が宗内でなされ、聖岡教学は学問の中心から離れ、一般の人々の記憶からは徐々に消えていくことになりました。

2019年には芝増上寺で聖岡上人の600年遠忌が執り行われました。また近年、聖岡上人を対象とする研究者も増え、その思想や事跡が注目を集めています。常陸大宮市史では、聖岡上人の十数種ある近世の伝記を列挙し、常陸大宮市に関する記述を中心に取り挙げて、聖岡上人の生涯を追っていきます。ご期待ください。